

研究

橋門韻語(二)

解説編集 鶴野博文

(会員 佐伯市田ノ浦)

資料提供 佐藤 巧

(会員 佐伯市池船)

前号の要点

咸宜園かんぎえんは、一八一七年(文化十四年)の創立で、橋門もんを放逐ほうちくした塩谷郡代しおや(代官)も同年に着任、中島子なかつま玉たまは前の年、桂林莊けいりんまう最後の年に入門しており、橋門は八年後の一八二四年(文政七年)に子玉と同じ十六歳で入門している。

子玉はこの時すでに咸宜園第一の秀才と目され、都講とこう(塾頭)も務め宜園ぎえん及び後輩の指導や世話ができる十分な地位と実力があり、橋門を三年も保護できたのである。

宜園入門から二十四年、橋門四十歳、佐伯藩主高謙たかあき公の厚い信頼により、藩の名代ともいうべき聘使へいしとして下直見から駕籠かごで出発、險阻けんそな三國峠を越え、三重町から竹田の岡城にさしかかる。

《補注》

塩谷郡代 〓 塩谷大四郎 日田代官、後に西国郡代となる。

桂林莊 〓 文化二年(一八〇五)、広瀬淡窓が作った私塾。十年後に移築開園される咸宜園の前身。聘使 〓 禮を尽くして迎えた使い 橋門の事

〇 観岡城(岡城を観る)

(漢詩)

(読み下し文)

雨晴雲氣未離山 雨晴れしも雲氣山を離れず  
多少樓臺彷彿間 多少の楼台彷彿の間  
憶得去年秋送簷 憶得たり去年秋 簷を送りしを  
暁帆帶月過松関 暁、帆は月を帯び松関を過ぎしを

この年は嘉永元年（一八四八）で岡城の城郭や周辺の建物が雲気の中に霞んでゐるのを観て、佐伯の美しい松関楼を思い出したものである。

※「松関」は佐伯町蟹田の松ヶ鼻山腹に在ったが今は山上の楼名を松関、又は松館と呼ぶ。元養賢寺の庵室にして蔭涼庵と言ひ楼上頗る眺望に富む。  
（佐藤蔵太郎「佐伯志」より）

### ○城原小絶

（漢詩）（読み下し文）

過岡地漸高 岡（地名）を過ぎ地漸く高く  
可以放一望 以て一望に放つべし  
来路山又山 来たる路は山又山  
下瞰如驚浪 下瞰せば驚浪の如し

### ○九重山下作（九重山下に作る）

九重或作久住 九重或いは久住と作す

（漢詩）（読み下し文）

百里蒼茫一望空 百里蒼茫空を一望す  
阿蘇猫岳割肥豊 阿蘇猫岳肥豊を割け  
野遙天鶴疑投地 野遙かに天鶴疑うらくは地に  
投ぜられんかと

路転西山忽在東 路転じ西山忽ち東に在り  
蛇母舛蟠偏喜雨 蛇母舛に蟠り偏に雨を喜ぶ。  
燕児花舞但関風 燕児花に舞い但風に関る  
倦来屢問宿何処 倦み（疲）来り屢々問う宿は  
何処かと

目断青之未了中 目断の青の未了中

夏の久住高原。青々と果てしない草原にはやぶさ、燕、蛇などを配置、大風景画の趣がある。

（漢詩）（読み下し文）

数尺輿中屈一身 数尺の輿中に一身を屈し

時驚興底触荊榛

時に驚く興底荊榛に触るに

沿溪殘雨未離樹

溪に沿い殘雨未だ樹を離れず

出隧旋風欲倒人

隧(トンネル)を出づれば

旋風人を倒さんと欲す

山與阿蘇顏競秀

山々阿蘇と顔の秀を競う

地於油布背相隣

地由布に於て背き相隣す

野花開尽皇皇色

野花開き尽し皇皇たる色

最喜幽姿慰使臣

最も喜ばしきは幽姿使臣(橋門)を慰むことなり。

この地方は阿蘇山にも近く凝灰岩が到るところに露出していて灰石とも言われ加工し易いので、建築や土木に利用されているが、この時代の生活水準からこの漢詩の背景を推察すべきである。

※隧道

例えば竹田市など、必ずトンネルを通らないと町に入れない。風が強くと当たらないト

ンネルから出た途端、人を倒すような強風

を感じると言っている。

《補注》

肥豊 肥後の国と豊後の国

天鶴 はやぶさ

蛇母艸 蛇莓草へびいちご

燕児 つばめの子 つばめ

目断 見えなくなるまで 見続ける

興底 こしの底

荊榛 イバラとハシバミ 荒れ果てた雑木

隧 トンネル

皇皇 美しくさかんな

幽姿 奥ゆかしい使い(橋門の事)

○小憩赤河(赤河に小憩す)

(漢詩)

(読み下し文)

久住原窮是赤河

久住原窮れば是赤河なり

一村一戸倚崑阿

一村一戸崑阿に倚る

小兒全不似人子

小兒全く人の子に似ず

老婦還疑或鬼婆

老婦還疑或は鬼婆かと疑う

敗席舖時看風動

敗席(やぶれむしろ)の舖

行厨開処苦蠅多  
可憐天分元前定

時に虱の動くを見る  
厨くりやに行き開く処蠅多きに苦しむ  
憐れむ可し天分元々前より  
定まれるを

誰識真成安樂窩

誰ぞ知らん真に安樂の窩すみかと成す

(淡窓評)「諸篇、述べる所、皆予の昔遊せきゆうの地にして

(ますます) その味を覚ゆ」

《補注》

赤河がくわ 赤川 (地名)

崑阿こんあ 切り立った崖のある丘

敗席はいせき やぶれむしろ ぼろぼろの敷物

昔遊せきゆう 若き頃訪れた

○奉呈淡窓先生 (本文・読み下し文)

當年逐客

逐客事、詳於中島子玉詩、詩云龍也、人中龍  
名實不相左、十五發大志 自企董与賈 手擲

耒耜らいし 去 操觚事文雅 人物頗快爽 天材亦  
磊砢らいこ 筆陳萬馬奔 詞源三峽瀉

當年の逐客ちやくかく(あの時放逐された者客のこと)、中島子玉の詩に詳し。詩に言う。龍也、人中の龍にして名実なま左さわず。十五、大志を發し、自ら企てること董とうに(深く)賈か(品)は与え、手に鋤すまを擲なげちて去り觚こ(文章)を操り、文雅を事とす。

人物頗る快爽、天材また磊砢らいこ(奇才)筆陣は万馬奔はしりり、詞源(語彙)三峽より流出す。

《補注》

逐客ちやくかく 他国から遊説に来ていた論客を国外に追放する

董 我が道を行く ただす

觚 しかづき 木簡 文章

磊砢 奇才 異能

筆陣 詩文の構成

万馬 たくさんさんの馬

三峽 四川省を流れる長江の三つの大峽谷

瞿塘峡、巫峡、西陵峡の総称

四川省を流れる岷江の三つの峡谷

李白の歌「峨眉山月歌」の三峡

常に木が切られ、はげ山になっていたという。  
緒あか赤 赤土

往時寓日田 生活極轆軻 食難支晝昏 衣豈分

冬夏 四支長苦寒 一腹常不果 奇窘生奇計

心中深自裏閉戸 髡其頭濯濯 牛山緒

寮友疑昼寝 共来責懶懶惰 入室不見子 唯見  
孤僧坐拈掌皆驚倒 摩頭獨喧歌 山雀為海蛤螟  
蛉 肖螺贏 持鉢出乞米 誰復辨真假 自欣為  
上策 何料招奇禍 府尹聞而怒 叱罵聲甚哆  
目之以妖人放逐

往事、日田に寓し、生活極めて轆軻（不運）なり食は  
晝昏（朝夕）支え難く、衣は豈冬夏を分かつたんや。四  
肢長くして寒に苦しみ、一腹常に果たさず。奇窘（思  
わぬ苦しみ）奇計を生じ、心中深く自ら裏に戸を閉ざ  
し、其の頭を髡（剃り）して濯濯たる牛山の緒なり。

《補注》

轆軻かんか志を得ない

晝昏びやうこんあかつきとたそがれ 朝夕

奇窘ききん思わむ苦しみ

濯濯じやくじやく光かがやく 容姿が美しく艶がある

牛山ぎゆうざん山東省にある山 齊の都に近かつたため、

寮友 昼寝を疑って共に来たり怠惰を責めんと室に  
いるも 子（橋門）見えず、唯、孤僧の座れるを見て  
掌を打って驚倒す。頭を塵で独り喧しく歌う。「山の  
雀、海の蛤となり螟蛉（あおむし）は螺贏（似我蜂）に  
肖んとす」と。鉢を持ち出でて米を乞う。誰か復真假  
を弁せん。自ら欣びて上策と為す、何れの料か 奇禍  
を招く。府尹（郡代）聞きて怒り叱るに罵声甚だし、之  
を目するに妖人を以て放逐す。

《補注》

螟蛉めいれいあおむし

螺贏から似我蜂しがばち

真仮まがい二まこと

府尹ふいん二府の長官 行政官

関西社之子不挑兮 彼人何虐也 縱使密越来爭

免囹圄鎖 子来乞我憐 嬌兒慕老爺 我亦憫其窮

母雞伏雛卵 引為不速賓 知子不庸瑣 一旦

彈長鋏 此意知者寡 人皆挽子留 強欲扣其馬

吾獨勸子行遠 茲送干野 子心持兩端 何取而

何捨 泛泛無所依 不異中流柁 傷別誰無情

関西社の子は挑まざるに彼の何で虐げん。

縦たてえ密ひそかに超こえ来きたらしむるも争いか 囹圄れいぎよ(牢獄)の

鎖しを免まれんや。子(橋門)来きたりて吾(子玉)に憐あはれ

みを乞こう。嬌せう兒に老爺を慕あがい、我わも亦またその窮きうを憐あはれみ、母

雞けい雛に卵らんに伏ふすは、引ひいては窘くろを速すみめざる為ためなり。子こは

瑣さ(末)を庸もちいざるを知る。一旦いつたん長なが鋏せき(不運)を弾はじ

ること、此この意いを知る者う寡すくなく、人ひと皆みな、子こを挽ひき留とどめ、強こ

いてにその馬うまを扣おえんと欲ほす。

吾わ独ひとりり、子こに滋ます遠まくへ行いくを勸すすめ干野かんやに送おくる。子この心

兩端りうたんを持もし、何なにを取とり、何なにを捨すてるか、泛はん泛はんとして依よる所ところ無なく、中流ちゆうりゆうの楫かじに異ことならず。

別れを傷やみて誰たれぞ情なさけ無なからん。

請子莫尤我 令我れい最た所ところ傷や 更有また大焉者 東山小

魯邦 泰山小天下 上高則覽遠 宣尼辭豈 頗

懷安古 所憎お竈いん勉べん 吾所わ罣か子也 去須速 莫被

離愁惹 吾將欣而扑矧 教別淚灑 不見柳宗元

嘗賀人失火 欲哀却喜之相效 寧不可所以 作

斯詩 子薦杯舉

請こう子(橋門)、我わを尤まむ莫なれ。我わを最たも傷やましむるも

の有あり。東山とうざんは魯ろの邦はうを小せうにし、泰山たいざんは天下てんかを小せうとす

る。高たかきに上あれば則すなはち遠とほくが覽みわたる。宣尼せんに(孔子)の

辭ことば、豈あらなく頗さる安やすんじて古ふるきを懷おもえるや憎にくむ所ところは罣ひ勉べんな

るも、我わの罣かとする所ところ也。速すみきを須もちて去いれ。離愁りしゆうに惹ひ

かれること莫なれ。吾わ、將まさに欣よろこびて扑むべく矧いわんや、別れわかれの涙、

散ちらしめん。見みずや、柳宗元りゆうしゆうげん、嘗かつて人ひと、火ひに失うせられる

を賀がし、哀あはれまんと欲ほして、却かえつて之これを喜よろこぶことに相あ

効たすかう。寧なろ不可ななる所以ゆゑを斯かく詩うたに作つくれり。子(橋門)

の為杯舉を薦めん。

《補注》

圈圍れいゐ 二ろうごく

長鋏ちやうきやう 二長い柄の刀 斉ちやうかみんの孟嘗君に食客の馮驩の故

事から。待遇や地位に不満

泛泛はんはん 二浮かびたよう 広大無辺

宣尼せんじ 二孔子

黽勉びんべん 二つとめてはげむ 勉強する

柳宗元りゅうそうげん 二中国中唐の文学者・政治家 唐宋八大家

杯舉さいか 二さかづき 三本足の酒器

の一人。

【歐】 子玉 僕不知其為誰 但此詩情文併至 有一

唱三嘆之妙 故不覺圈点爛然 幸其恕不恭

《中村敬字評》

僕、子玉、その誰た為かを知らず。但し、此の詩情、

文に併せ至りて、一唱三嘆の妙、故に覺えず圈点

爛然らんぜん たり幸その不恭ふきやうを恕ゆるす

《補注》

中村敬字けいじ 二幕末・明治の教育者・文学者 江戸麻

生まれ。諱いみなは正直 昌平しやうへい 饗きやうで学び、のち教授

になる。

圈点けんてん 二句読点 詩文の優れた所にわきにつける丸印

爛然らんぜん 二あきらか 輝きく すばらしさ

不恭ふきやう 二つつしみなし

ここでは橋門が郡代によって放逐処分になり、子玉等が、どのような心情で対処したかが、やや具体的に書かれている。

先ず、彼の文章については、たくさん馬が奔るよ  
うな力強い勢いがあり、詞源（語彙）豊富で中国の三  
峡の豊富な水量とその流れの速さに例えている。

しかし咸宜園での生活は極端な貧困に追い詰めら  
れ、ついに偽坊主になるという奇計を思い付く。

きれいに剃った頭は、濯濯たくたくとしてひかり輝きき牛山ぎゆうざんの  
緒あかと呼ばれた。（これも中国、斉の都の近くにあったた

めしよつちゆう木を切られて禿げ山だったので）剃りたての橋門の頭を例えたのである。また彼は、自分の変身を弁解するのに、「山雀は蛤になったり、螟蛉（青虫）がジガバチの養子になりたいなどと云って調子に乗っていたところを塩谷大四郎正義に知られ、「妖人」妖しい人間」と目され追放された。ここに至って子玉をはじめ橋門の保護活動が始まる。大勢の者は、情に流され何としても保護せんとする。

しかし、中島子玉は独り冷静な判断力でもって対しようとする。なにしろ、橋門本人でさえ、この放逐命令に対してどうすべきかの取捨選択ができず、舵を失った船のような状態で子玉に助けを求める。子玉は、郡代の激怒ぶりから、同情派が、縦（たと）え橋門にこの急場を密かに、飛び越えさせても、争（い）か（どうして） 圍（れい）置（き）（牢獄）の鎖を免れようか（できない）、と考えている。（争Ⅱ反語用法）

中国、戦国時代、多くの食客の中に（長刀）を持った男が待遇に不満で、「長鋏よ帰ろう」と云って去った例を引いて、一旦、長鋏は弾（はねのけ）離別の情に惹かれずできるだけ速くこの場を去ること、孔子は一

段高い所からものごとを見よ、と言ひ、柳宗元は、人が火事で亡くなつても、悲しい挨拶はするな、と言つているのを深く理解しなさい。君を元気づける為、立派な酒杯（杯罌）を薦めよう。（続く）

